



サツマイモの収穫
大きく育ったサツマイモはどれかな？

ここに教育あり

ふるさとの農業を 実践から学ぶ ～小学校農業科の取組～



福島県喜多方市教育委員会
学校教育課 課長補佐・指導主事
なかのよしまさ
中野 富全

喜多方市の小学校農業科

本市は、福島県の北西部、会津盆地の北部に位置し、平成18年1月4日に5市町村が合併した市です。産業は、稲作を基幹作物とする農業が中心ですが、雄大な自然、蔵や文化財、ラーメンやソバなどの観光産業や良質な水と米をもとにした酒造業、桐材加工や漆器製造など伝統的な産業もあります。

本市の特色ある教育に小学校農業科（以下、「農業科」）があります。この農業科は平成19年度から取り組んでいて、本市の全小学校17校が1年間を通して農業体験を行っています。授業時間は年間30時間程度、総合的な学習の時間を活用して行っています。本市の基幹産業である農業の体験を通して、「豊かな心の育成」（「いただきます」「や」「もったいない」などの言葉の意味について考え、感謝の気持ちや慈しみの心を育てる）、「社会性の育成」（数ヶ月にわたる農作物栽培を通して、児童に責任感をもつことや努力することの必要性を気づかせ、社会性の育成を図る）、「主体性の育成」（目標を設定し計画を立てて取り組むことで、

主体的な学習意欲や取り組む態度を育てる）を行っています。

各学校では農業を教えてくれる農業科支援員（以下、「支援員」）を毎年募り、授業を教員とともに行っています。支援員は地元農家の方々だけでなく、児童の家族や学校運営協議会のメンバー、地元公民館の学習ボランティアなど様々な人がいます。今年度（令和6年度）は市内の全小学校17校で合計104名の支援員の協力を得て授業を行っています。各小学校に1～15名の支援員が、農業のことを児童に教えています。また、学校では農業科担当教員を決め、支援員との連絡や日程調整などを行っています。農業科の活動は天候に左右されることが多いため、担当は行事や日程調整がしやすい教務主任や学年主任が務めることが多いため、学校によっては若手の教員が務めることもあります。本取組以前の平成18年頃の学校では、児童生徒の規範意識や社会性の希薄化、不登校の増加、自律心や学ぶ意欲の低下、生活習慣の乱れなど、21世紀を担う児童生徒を取り巻く問題が深刻化し、社会全体に大きな影響を落としています。

した。そのため、学校現場においては「豊かな心の育成」「個に応じた教育」「授業の質的改善」等に取り組み、一定の成果は上げていたものの、根本的な解決には至っていない状況が続いていました。そこで農業科に取り組み、「なすこと」によって学ぶ「精神」に基づき、農作業の実体験活動を重視した教育を展開して、今年度で18年目を終えようとしています。

農業科の取組

農業科では、農作物の栽培だけではなく、農業と環境とのかわりや農業と人間とのつながり、「生命」などについて学びながら、地域の基幹産業である農業の本質を子どもたちにより深く知ってほしいと考えています。また、将来児童が就農することも考え、農業の用語、肥料、技術的なことや受け継がれてきた知恵など、専門的な内容も幅広く学んでいます。まず春に行うことは、支援員との打ち合わせや支援員と児童の顔合わせ会を行っています。ここで農業科の今年度の取組を児童や支援員と共有しています。また、農業科で育てる作物を決め、田畑の活

写真(上):田植えの風景 昔ながらの手作業で田植えを行っています。写真(下):稲刈りの風景 手刈りした稲を藁で結び、これから天日干しをします。写真:福島県喜多方市教育委員会提供(3点とも)



動を行っています。農業科に取り組むのは全児童、3年生からなど、学校の方針により様々です。春には一大イベントの「田植え」を行います。昔ながらの手作業で苗を手で植えていきます。学年の人数が多い学校では5年生だけが田植えを行う学校もありますが、小規模校が多いため、ほとんどの学校で全校体制により田植えを行っています。上級生が下級生に田植えの手法を見せ、異学年が共同で活動できる場にもなっています。

夏にはトマトや枝豆、トウモロコシなど夏野菜の収穫を迎えます。その収穫を迎えるまでに行っているのが水の管理と除草です。これらの作業は手間がかかり、嫌がる児童も多くいます。水の管理は水

道や川が畑の近くにある学校は容易ですが、そのような環境がない学校は畑まで水を運んで管理を行っています。また除草は頻繁に行わないと栄養が野菜にいかず、美味しい野菜が収穫できません。これらの作業の際は積極的でない児童が見られますが、育てた野菜を収穫したときにその作業の大切さを児童は感じるようになります。これも児童の成長する場面のひとつです。

秋は「実りの秋」の名の通り米やニンジン、サツマイモなどの野菜の収穫を迎えます。「稲刈り」は「田植え」同様に手作業で稲を刈りますが、鎌を使うので注意が必要となります。支援員をはじめ教員、学校によっては上級生が安全に作業するために注意をしながら時間をかけて丁寧に作業をしていきます。刈り終えた稲穂は昔ながらの天日干しや脱穀を行い、「米」となります。その米は収穫祭で食べたり、各家庭に配付されたりして、実りの秋を体験することができます。

冬には1年間の取組をまとめます。全国的に、興味をもつてくださった個人や団体が視察にお越しただいてるところです。様々な質問や意見を賜り、農業のもっている教育的効果を再認識して、農業科の今後の方向性も検討しているところではあります。今後はキャリア教育としての取組も少しずつ取り入れていきたいと思っております。もしご興味がありましたら、視察にお越しただければと思います。

今後の取組

全国の市町村の学校で1年間かけて農業の体験を行っているのは、本市と北海道美瑛市の学校ということで、全国でもあまり例のない

農業の大変さ

「今年のねぎはどうやって食べようかな。」と、今年も収穫する日をとても楽しみに待っていました。私たちは今年も長ねぎを育てました。去年の長ねぎは、とてもよく育ち、野菜が苦手な私でもおいしく食べることができました。だから、収穫が近づくにつれてとても楽しみでした。しかし、夏休みが終わったある日、先生から、「長ねぎが今年の暑さでだめになった。」と聞いて、食べることを楽しみにしていた私はとてもショックを受けました。みんなも、「暑かったから、しょうがないよね。」と言ってすぐにあきらめていました。私も、今年の暑さはすごかったから仕方ないかと思っていました。

でも、家族とスーパーに買い物に行ったとき、野菜コーナーにはよく育った長ねぎが並んでいるのを見て、ある疑問が浮かんできました。同じような気候で育てても、なぜスーパーには長ねぎがあるんだろう？

そこで、私は自分たちの育て方を振り返ってみました。すると、とても暑い中、草むしりや水やりはほとんど先生たちにまかせ、農業科の活動でも、「面倒くさい」と思いながら草むしりをしていた自分が思い浮かびました。こんな態度で長ねぎを食べることだけを楽しみにしていた自分にだんだん腹が立ってきました。また、去年まではそんな態度でも気候に恵まれていたため、収穫ができて農業は簡単だと思っていたことも恥ずかしくなりました。

作物を育てるために、様々な工夫をして、とても大変なことでも面倒くさがらずに続けるということは簡単にはできません。今年、長ねぎの栽培に失敗したことで、食べ物一つを作るにも、農家の方々の知恵と苦勞がかかっていることを実感することができました。今年の農業科の学習は、農業の大変さに気付く機会となりました。

コンクール出品された6年生(当時)の作文

農業科に、興味をもつてくださった個人や団体が視察にお越しただいてるところです。様々な質問や意見を賜り、農業のもっている教育的効果を再認識して、農業科の今後の方向性も検討しているところではあります。今後はキャリア教育としての取組も少しずつ取り入れていきたいと思っております。もしご興味がありましたら、視察にお越しただければと思います。